

第2章 2018年慢性透析患者の動態

1. 臨床背景

2018年の患者調査票において、性別、年齢が記載されていた人数は327,336人であった。このうち男性は214,078人、女性は113,258人で、全体の平均年齢は68.75歳であった（図3、補足表3）。平均年齢は年々増加傾向を示している（図4、補足表4）、最も割合が高い年齢層は男女とも70～74歳であった。また65歳未満の患者数は2012年から減少し、70歳未満の患者数は2017年から減少している。つまり、わが国の慢性透析患者数の増加は、70歳以上の患者数の増加によるものであることがわかる（図5、補足表5）。

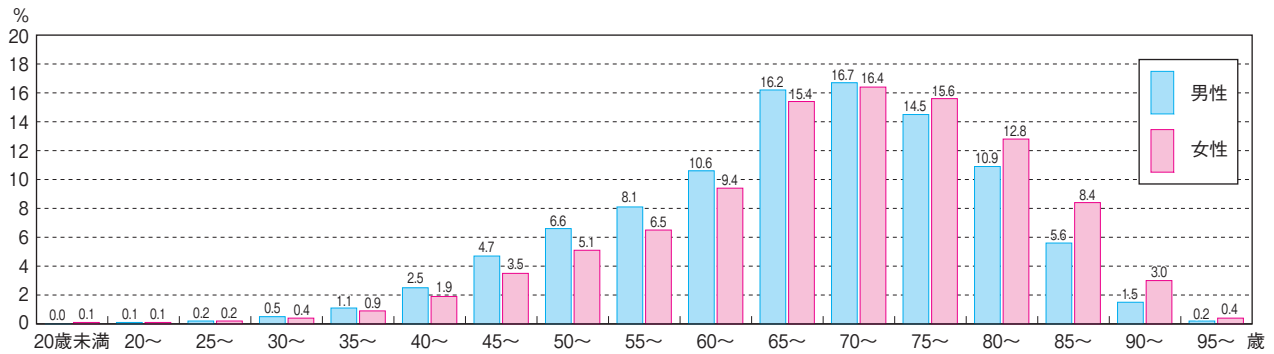


図3 慢性透析患者 年齢と性別, 2018

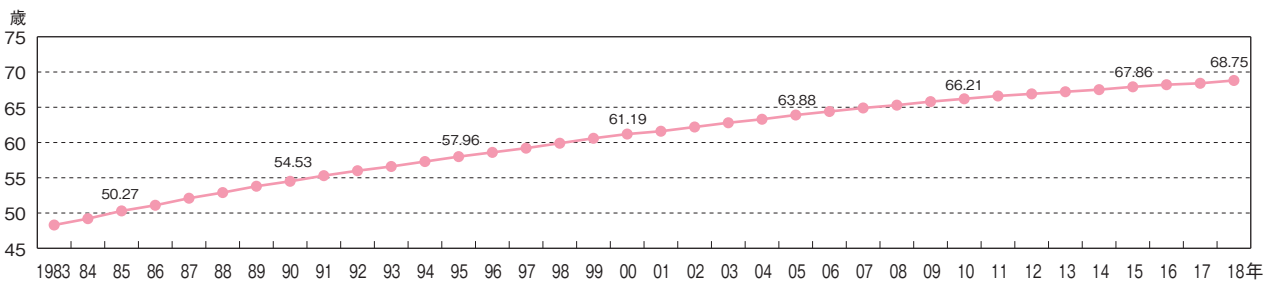


図4 慢性透析患者 平均年齢の推移, 1983-2018

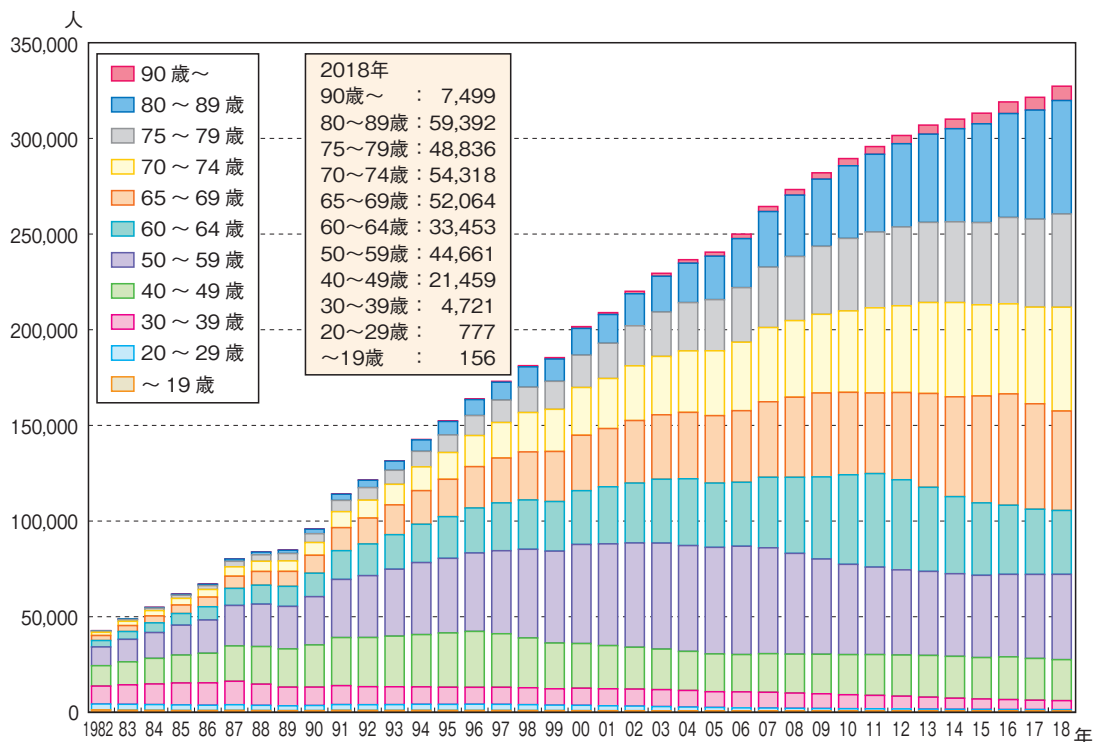


図5 慢性透析患者 年齢分布の推移, 1982-2018

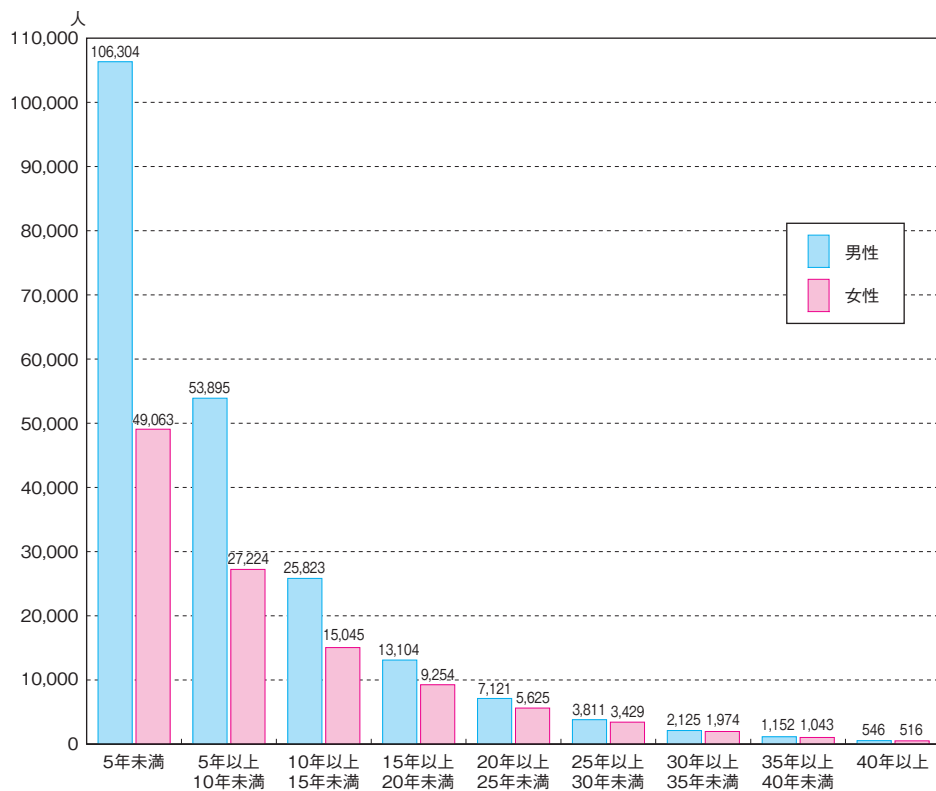


図 6 慢性透析患者 透析歴と性別, 2018

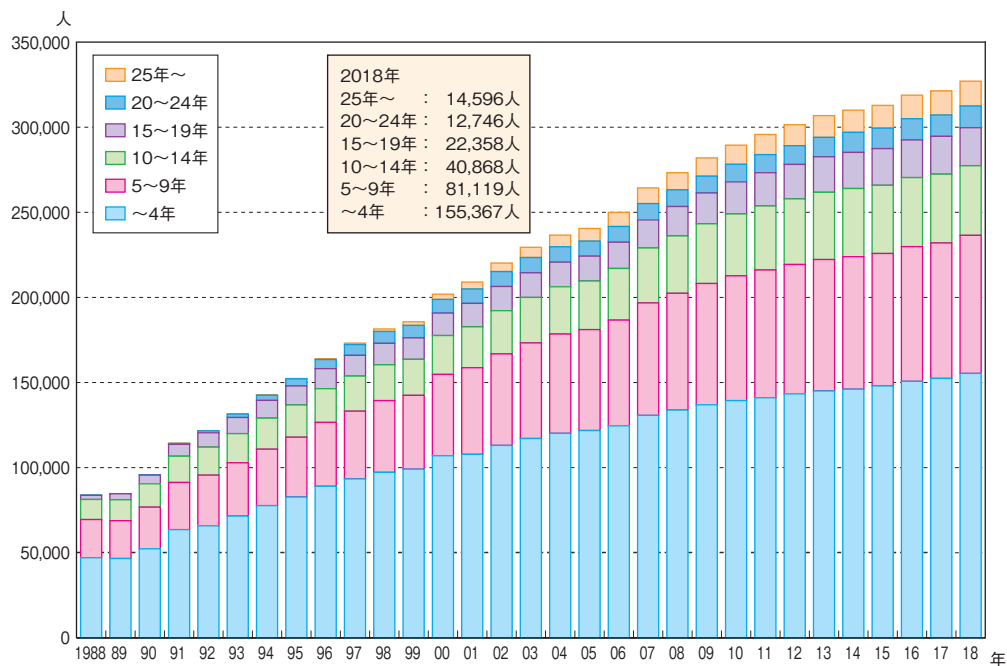


図 7 慢性透析患者 透析歴分布の推移, 1988-2018

2018年末時点の慢性透析患者の平均透析歴は男性6.82年、女性8.32年、全体で7.34年であった。透析歴5年未満が全体の47.5%を占め、透析歴20年以上は8.4%、30年以上が2.2%、40年以上が0.3%であった（図6、補足表6）。最長透析歴は50年4ヵ月であった。透析歴の長い患者は増加しており、10年以上の透析歴を持つ患者が27.7%に達している。1992年末には1%に満たなかった透析歴20年以上の患者は、2018年末には8.4%に達している（図7、補足表7）。

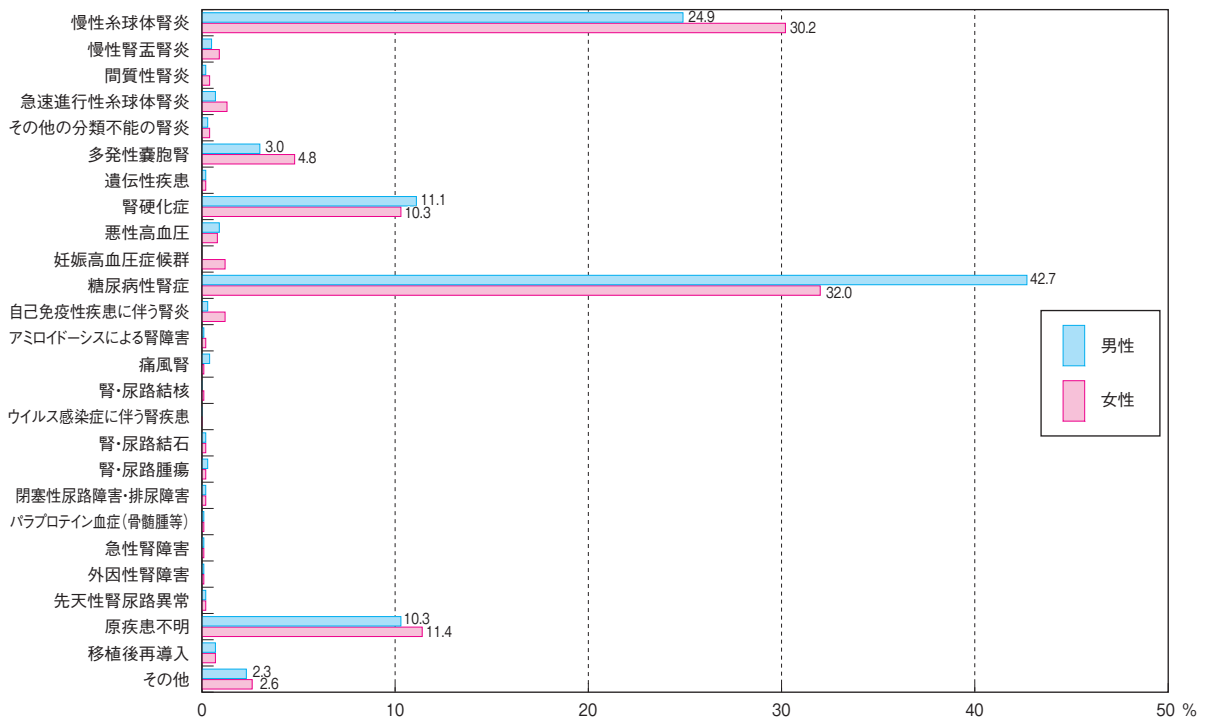


図 8 慢性透析患者 原疾患と性別, 2018

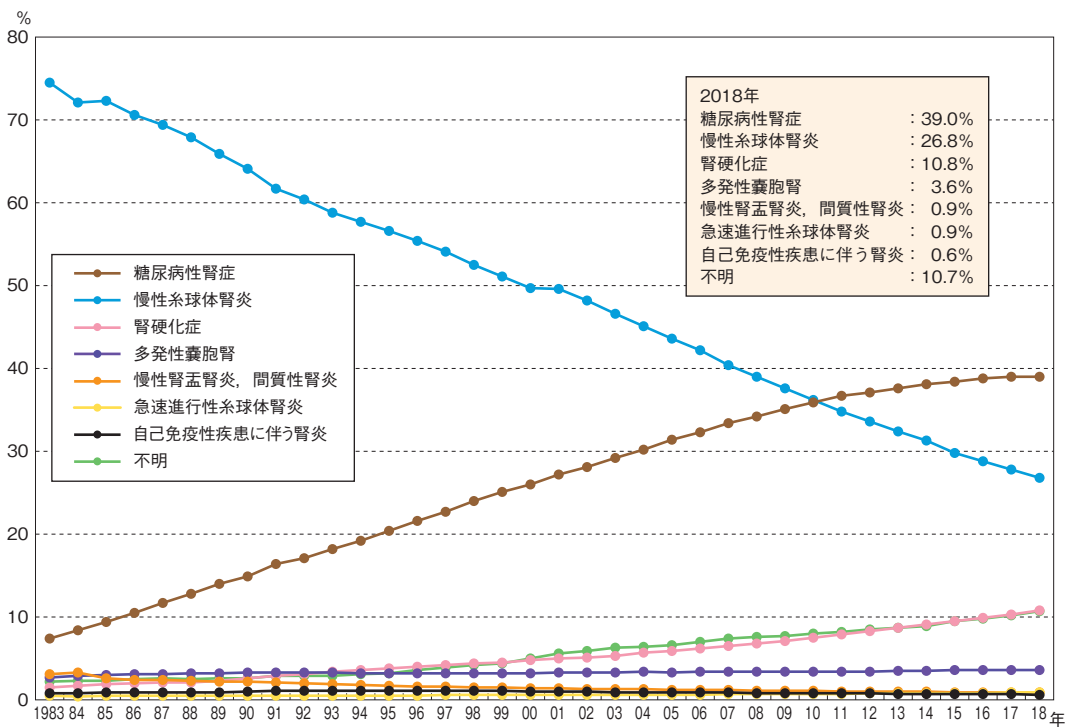


図 9 慢性透析患者 原疾患割合の推移, 1983-2018

2018年末時点の慢性透析患者の原疾患で最も多いのは糖尿病性腎症の39.0%で、次いで慢性糸球体腎炎が26.8%、腎硬化症が10.8%であった（図8、補足表8）。糖尿病性腎症の占める割合が持続的に上昇し、2011年に慢性糸球体腎炎に代わって原疾患の第1位になった。その後も持続的にその割合は上昇したが、近年プラトーに達しているようである。慢性糸球体腎炎は直線的に減少し、腎硬化症、原疾患不明は持続的に上昇している（図9、補足表9）。なお、原疾患コードは2017年末調査で一部変更しており注意が必要である。

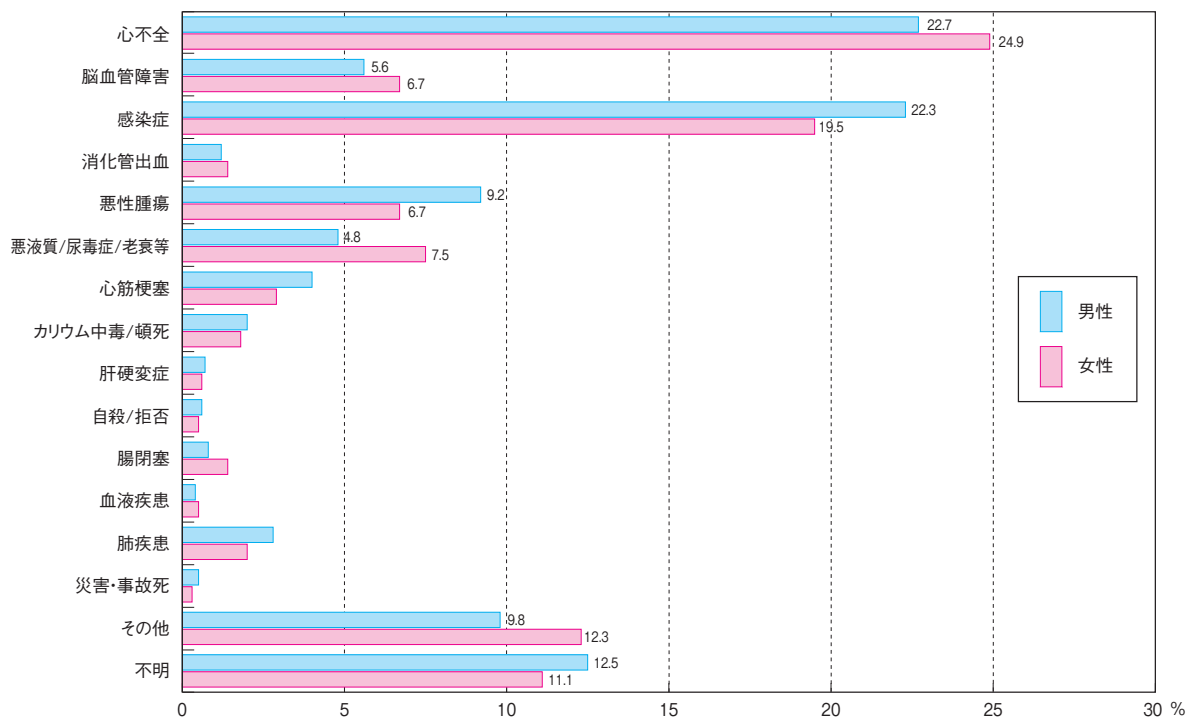


図 10 慢性透析患者 死亡原因と性別, 2018

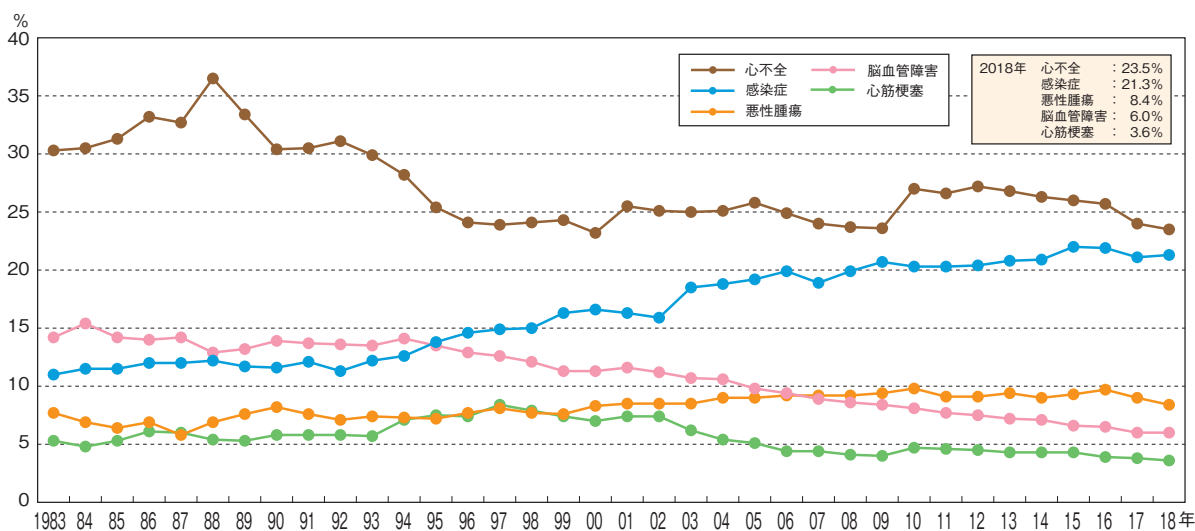


図 11 慢性透析患者 死亡原因割合の推移, 1983-2018

2. 死亡原因

2018年の施設調査票では、33,863人の死亡が報告されていたが、患者調査票において死亡原因と性別が記載された患者数は31,117人であった。死亡原因は多い順から心不全、感染症、悪性腫瘍、脳血管障害であり、それぞれ全体の23.5%、21.3%、8.4%、6.0%であった。その他は全体の10.6%であった。心不全、脳血管障害、心筋梗塞を併せた「心血管死」の割合は、33.1%であった（図10、補足表10）。

死亡原因の推移では、1983年から心不全による死亡が最も多く、1995年以降、25%前後で推移している。一方、感染症による死亡は1993年以降、増加傾向にある。脳血管障害は1994年以降漸減傾向にある。心筋梗塞による死亡も、1997年の8.4%をピークに漸減傾向である。悪性腫瘍死は1987年の5.8%を底に少しずつ増加していたが、2004年に9.0%台になってからは横ばいである。前述した心血管死の割合は、1988年には54.8%であったが一貫して減少し、2018年には33.1%であった（図11、補足表11）。なお、本調査における死亡原因分類コードは、2003年末、2010年末、2017年末調査の3回改訂されていることに注意が必要である⁹⁾。

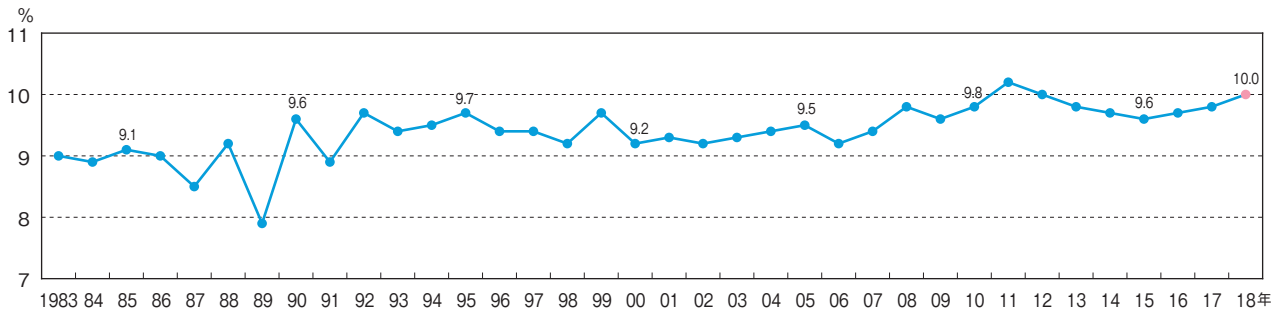


図 12 慢性透析患者 粗死亡率の推移, 1983-2018

3. 粗死亡率

施設調査における患者動態から年間粗死亡率を計算した。

$$\text{粗死亡率} = \left\{ \frac{\text{死亡数}}{(\text{前年患者数} + \text{調査年患者数}) \div 2} \right\} \times 100 (\%)$$

粗死亡率は、アンケート回収率が低かった1989年の7.9%が最低値を示したが、概ね9～10%で推移し、2018年末は10.0%であった（図12、補足表12）。